

尙ほ終りに一言附け加へて置きたいことがある。それはかのイスラエル (Israel) の子孫がさきにヒチット人 (Hittites) やペリチット人 (Perizzites) やフィリスチン人 (Philistines) の住んでゐた土地を發見したと同じやうに、遊牧のアーリヤ人種も亦彼等が印度に侵入して來た時にはシシアン人 (Syrthian) や土蕃民族——彼等はダスユー (Dasuyas) アナールヤ (Anaryas) ニシヤード (Nishādas) 或はドラビダ (Dravidas) と種々に呼ばれてゐる。そして彼等は長い間印度の太陽に晒らされたためか或は恐らくモット原始的な黒面土蕃の民族と結婚したためか、彼等の顔色は殆んどアフリカ人のやうに黒くなつてゐる。——の持つてゐた土地を發見したといふことである。(完)

讀佛教各宗より見たる太子の信仰

石井 教道

ペーコン曾て四種偶像の打破を叫むだその中に、劇場の偶像なるものを數ねた。古人の傳説や一般の流行に一種の權威を認め、之が是非曲直を究めずして無批判に盲従する人心の傾向を指したのである。恚うした心理が吾人を知らずくりに導い

て居ることが少くない。然るに近代、批判的歴史的研究が盛むになつてから、追々此の種の偶像が打破されるやうになり、昔しの黒が白となつたり、古への白が黒と化ける事がチヨイ／＼現はれるやうになつた。その中で面白い事實の一つは、徳川時代に其の名もブツ、ツ、ツ、な物徂徠なる男が儒家といふ偏見に囚はれ、日本佛教宣傳の始祖であり、又、日本文化の建設者である聖徳皇太子を悪しざまに傳へてから、一部の信仰を除いて多くの民衆は太子の頌徳を忘れて了ふたのである。然し偽物は剝かれ眞金は永久に輝やく理りに洩れず、太子研究の結果は、全く其の劇場の偶像の正體を顯はし、太子の眞面貌が再び世に紹介されるやうになつた。殊に本年は、太子世を去りまして正に一千三百年に相當るので、或は口に或は筆に太子頌徳の聲四方に揚つたのは衷心からうれしい。その數多い中にも、畏友大屋徳城氏が數年太子と最も因縁の深い法隆寺の囑托をうけていろ／＼調査された秘書中、並びに多年古文書調査の爲め或は野山に或は日光にと東奔西走して得られた玉手箱の中から、今回太子關係の古記録に依つて、王子として生れ給ひし太子が、遂に祖師化、神格化さるゝまで民間信仰を高調さした史實を、一々古記録を摘録して論證され、題して「佛教各宗に於ける聖徳太子の信仰」といふ恐ろしい長い命名の下に公表された。僕にも一本を

賜はり十二分の批評を許された。が序文を拜見すると「希くは大方の君子余が微衷を諒とし杜撰を責むること酷なるなからんことを」と嘆願されてある。素より君子の中間入をする資格のない僕だから除外例として氣に入らぬ所は遠慮なく酷評しても差支ないやうにも思はれるが、今度は僕の方に都合がわるい。史家としての大屋君と僕とは研究科目から方法まで違ふから批評などは柄でない。さりどて黙つて了ふ譯にも行かぬから、左に聊か紹介に加へて僕として解せぬ點あれば教示を仰ぐ程度に止めて書いて見る積りである。

此の書を手にした一瞥の感じは、古色を帯びさしたゆかしい装幀等、いかにも史家の著述らしい感じを與へる、菊版の大書一卷百三十一頁、初め總説より、次ぎ別説に、りて天台宗に於ける太子の信仰を首めとして、華嚴宗、眞言宗、觀音信仰、時宗、律宗、禪宗、眞宗、中世貴族階級、太子遺物及遺跡崇拜と順次章を追ふこと十一章最後の決論を加へて全部十二章となつて居る。題名は極めて通俗であるが、中を搜いて見ると、佶屈贅牙の漢文が甚だ多い。然し、そこに史家の眞面目が偲ばれてうれしい。一々古記録を引いて思想の基く典據を明示し、決して想像や好い加減の法螺でない事は勿論、中々珍らしいものが引いてあるから研究上裨益する點少くない。故に面白可笑し

く讀み流して行く皮讀者には餘りギチ／＼し過ぎて讀み難いかも知れぬが、歴史家や眞摯な研究者には近來稀に見る價值ある珍書であるといふ批評も敢てお世辭でなからう。卷首に入れてある光明本尊や聖皇曼荼羅の寫眞を初め二十種の寫眞が入れてある。

如上は外的輪廓であるが、内容に至つては一々紹介の限りではない。然し大體は總説に述べてある太子信仰の二系統、即ち一は太子の本地を如意輪觀音なりといふ信仰と、一は各宗祖師と太子との本迹關係を認めて信仰したのこをそれ／＼の記錄に依つて徵證されたものである。法華經を講鑽し又末疏までお書きになつた日本佛教の開祖といふて差支ない偉大な太子が法華經の本迹思想から連聯して種々な信仰が起るのは自然であらうが、トニカク南岳、天台の後身説から傳教は太子の再來などいふ信仰を起すやうになつた文書を順に引いて叙してあるは中々面白い。次に華嚴宗に於ける太子の信仰として聖武天皇と太子との本迹信仰を擧げられたのは尤もに思ふが、聖寶僧正を此の下に擧げられたのは聊か不審である。僧正は三論宗の復興者でもあり又眞言宗に於ける事相の二大潮流の一たる小野流の元祖である。勿論眞言宗の下にも一寸出ては居るが華嚴宗の下には入らぬ人のやうに思ふ

今こそ東大寺は華嚴宗であるが、昔は八宗兼學である。故に聖寶が建てた東南院は永久三論講學の道場としてとあつた。故に是は三論宗に於ける太子信仰とした方が適當のやうに考へられるが、是には何か理由があるのであらうか。今一つ未解の點を遠慮なく云はふなら、眞言宗の下で五尊曼荼羅を聖皇曼荼羅と對比して空海は太子の後身なりといふ信仰の表象であること疑ひないやうに命じられたが、あの五尊の配置を見ると、中台は大日であつて、四方に夫れ〵如意輪、虛空藏、弘法、太子といふやうに畫かれて居る。是は中台法界體性智の四用としての四智を人格的に表現したものと見るなら、寧ろ大日の化身といふ思想の下に畫かれたものとすべきではなからうか。強いて聖皇曼荼羅と同一思想になつたものと見ねばならぬ必要もないやうに思はれるが如何でせう。下らぬ批評は止して今一つ感じた點を紹介するであらう。法華經の宗教的生命である慈悲の權化として叙述されて居る普門品の主人公なる觀音菩薩と太子との間に本迹信仰が起つてから、淨土教の方に太子が濃厚な關係を持ち給ふやうになつた思想の經路である。彼の優婆塞宗としての眞宗の如きは、その信仰の外に優婆塞形の太子の外的形式を延いて以て自宗信條の最古典型者として仰鑽して居る事が種々の文を引いて叙せられてある。如上の外太子

の遺蹟、遺物等が神聖視さるゝ程に民間信仰を高調さして史實など、如何に太子が我が國民の上に偉大な力を持ち給ひしかを證するに足る。嘗に獨り宗教方面のみの功勞者ではなく、太子がその神として崇むやうに、其他我が國文化の開拓者、創始者でましますのである。然し斯の如く太子の功績は實に偉大なものであるが、太子文化の中心は奥深い宗教信仰にあることを忘れてはならぬ。如上各宗より太子を信仰し奉るといふことは、畢竟、太子に深い宗教信念があつたからである。恚ういふ點を綜合して現代を考ふるに、人間生活の基調を爲す宗教信仰を顧慮せず、否寧ろ之を嫌惡して皮相な國政や文化を論ずる現代人は、能く太子の憲法や内的精神に味到して、須らく熟慮反省すべきである。こゝに著者が今回本書を公表さるゝ眞意があるのであらう。して見れば、此書の一面は確かに研究的態度ではあるが、他面、時節柄現代人を覺醒さす清涼劑たる宣傳書なること疑ひない。吾人が初めて批評した通俗の題目がこゝに了解される終りに、菫み氏の勞を謝すると俱に、切に先輩知己の座右に一本を置かれむことを薦めて置く。妄評多謝。